

動詞－不変化詞表現 *talk one's head off* で使用される動詞について*

長井みゆき

1. はじめに

本稿では、Jackendoff (1997: 551) で「結果構文に基づく動詞－不変化詞構文」と提示されている表現のうちの1つ、*talk one's head off*のような表現において、どのような動詞が使用されるか、また *head* 以外の使用において、共起する動詞に違いはあるのかを調査・分析する。Jackendoff (1997: 551) において、この表現は “...apparently lexically listed as *V pro's head off*, etc., with a free choice of intransitive verb, subject to selectional restrictions” とされている。はたして具体的にはどのような動詞の使用が可能なのかをコーパスとインフォーマントによって得られた情報を利用して明らかにすることが、本稿の目的である。今後この結果を利用し、その他の身体部位を伴う動詞－不変化詞表現 (*cry one's eyes out*, *sing one's heart out* など) と比較し、各表現間の相関関係を模索することができると思われる。この調査には、The British National Corpus (World Edition) (以下BNC)、Collins Wordbanks Online¹ (以下CWO)、およびインフォーマント2名²の判断結果を用いた。

2. 先行研究の概観

2.1. Jackendoff (1997) の観察

まず本稿で扱う表現が、どのような表現であるかの概略を示す。Jackendoff

* 本稿の完成にあたり、多大なる御教示、御助言をいただきました、本学会の匿名の査読委員お二人に深謝いたします。

(1997) では、「time-away 構文」と名づけられた *Bill slept the afternoon away* のような文と、それと表面的に似た形をもつ「結果構文」*Amy pounded the clay flat*、そして「one's way 構文」*Beth whistled her way across America* の 3 種類の文を比較し、「time-away 構文」固有の統語的特徴、意味的特徴を説明している。その中で Jackendoff (1997: 551) はイディオム表現 (1) *cry one's eyes out* とともに、“a class of verb-particle constructions that resemble idioms such as *cry one's eyes out*, which are generally taken to be based on the resultative construction” として、(2) のような 3 つの表現を示している。

- (1) *cry one's eyes out*. (Jackendoff 1997: 551)
- (2) a. Fred *talked his head/his ass/his butt off*, but to no avail.
 b. The chef was *cooking up a storm* back in the kitchen.
 c. Every night I sit here and *sing my heart out*; but does anyone listen to me? (ibid.) (斜字は筆者による)

そして、(2a-c) の動詞-不変化詞構文は、(time-away 構文や one's way 構文と同様に) 様々な自動詞が使用できる、としている。またこれらの表現は *V pro's head off* 等の形でレキシコンに記載されており、選択制限はあるが自動詞の選択を自由に行うと述べ、使用できる動詞の多さを (3) に示している。

- (3) a. Susan *worked/swam/danced her head off* last night.
 b. Harry *sang/argued/painted up a storm*.
 c. Sam *programmed/yelled his heart out*. (ibid.) (斜字は筆者による)

また多くの動詞-不変化詞構文では NP と不変化詞の順序を変えることができるが、(2)・(3) のような表現は time-away 構文とは異なり、語順が固定されており、(4) の場合は非文になるとしている。

- (4) a. *Susan *worked off her head*.
 b. *Harry *sang a storm up*.
 c. *Sam *programmed out his heart*. (ibid.) (斜字は筆者による)

そして、この表現にある「NP＋不変化詞」の組み合わせは...carries a sort of adverbial force, denoting intense and perhaps passionate activity としている。

2.2. Culicover and Jackendoff (2005) の観察

Culicover and Jackendoff (2005: 32) では、(5)・(6) で示される2種類の動詞－不変化詞構文を示し、(5a, b) と (6a) は表面上は V NP out/off という構造を共有し、(5c) と (6b) は V up NP という構造を共有しているが、(5) と (6) で使用される動詞には違いがあると述べている。つまり、(6) の動詞 throw, pick はそれらに続く補部 the trash, the garbage を認可できるのに対し、(5) の動詞 sing, yell 等はそれらに続く補部 his heart, his head を認可できない、と述べている。

- (5) a. Pat *sang/drank/sewed* his heart out. [also his guts]
b. Terry *yelled/wrote/programmed* her head off. [also her butt, her tush, etc.]
c. Leslie *talked/cooked/composed* up a storm.
(Culicover and Jackendoff 2005: 32) (斜字は筆者による)
- (6) 通常の動詞－不変化詞構造
a. Pat *threw* the trash out.
b. Leslie *picked up* the garbage. (ibid.) (斜字は筆者による)

さらに Culicover and Jackendoff は、(5) の例で使用される動詞はこれらの補部を認可できない代わりに one's heart out/one's heard off/up a storm といった固定化された表現 (idiomatic combinations) を認可している、と述べている。

そしてその idiomatic combinations は、大まかに言えば intensely and/or excessively を意味し、「意味的には副詞のように機能するが、動詞が目的語を認可できないことから、それらのイディオムの結合が、直接目的語の位置を利用している」と述べている。これについては (7) に示したように、「動詞がそれぞれの目的語を取れない」ことを理由にあげている。

- (7) a. *Pat sang *the Marseillaise* his heart out.
 b. *Terry yelled *insults* her head off.
 c. *Leslie cooked *eggs* up a storm. (ibid.: 33) (斜字は筆者による)

以上のように、Jackendoff (1997) と Culicover and Jackendoff (2005) では、(2a) は (3) のように様々な動詞 (または自動詞) が選択でき、NP+不変化詞の組み合わせで「激しい活動」の意味を表す、と説明している。しかし (2a) や (5b) の身体部位が完全に交替可能であるかについては、具体的には述べられていない。また、(3a) や (5b) に例示された動詞は全て等しく容認されるのかも確認が必要である。そこで本稿では、具体的に (2a) にはどのような動詞が使用されるか、また身体部位によって使用される動詞が異なるか、の2点を観察する。

3. 動詞の調査

(2a) の表現には実際にどのような動詞類が使用されているのかを観察するため、BNCとCWOから実例を収集した。それぞれ以下に示す検索式で検索した結果を精査し、今回の調査対象となる該当例のみを抽出した。

3.1. BNCを用いた動詞の調査

BNCでは (2a) の表現に対して、単数である *head off* と複数である *heads off* の両方の検索式で検索を行った。そしてそれぞれの単数・複数の表現で、(2a) で交替可能のように示されている *ass* とそのイギリス英語の表現形である *arse*、*butt* とその短縮前の語形である *buttock* についても検索を行った。その頻度とそこで使用されている動詞の内訳を以下の (8) と (9) にまとめる³。

(8)	検索式 <i>head off</i>	該当件数 61	検索式 <i>heads off</i>	該当件数 17
	検索式 <i>ass off</i>	該当件数 7	検索式 <i>asses off</i>	該当なし
	検索式 <i>arse off</i>	該当件数 6	検索式 <i>arses off</i>	該当件数 1
	検索式 <i>butt off</i>	該当なし	検索式 <i>butts off</i>	該当件数 2
	検索式 <i>buttock off</i>	該当なし	検索式 <i>buttocks off</i>	該当なし

(9) 単数 head off 61 件の内訳

act 1, bark 2, bawl 2, bloom 1, cheer 2, cry 1, laugh 20, play 2, roar 1, scream 9, shout 5, shriek 1, sing 2, smoke 1, sneeze 1, snore 2, sob 1, talk 2, worry 1, yawn 1, yell 3

複数 heads off 17 件の内訳

bark 1, bawl 1, chat 1, crow 1, gas 1, laugh 7, scream 2, sing 2, yell 1

単数 ass off 7 件の内訳 dance 4, play 1, run 1, work 1

単数 arse off 6 件の内訳 graft 1, work 5

複数 arses off 1 件の内訳 work 1

複数 butts off 2 件の内訳 graft 1, work 1

BNC の head タイプで一番頻度が高いのが laugh であり、78 件中 27 件 (34.6%) を占めている。臀部タイプでは dance と work が ass off と arse off の中で、それぞれ一番高い頻度である。頭部と臀部の頻度を比較すると 78 対 16 (83% 対 17%) と、圧倒的に head off の例が多いことが分かった。

3.2. Collins Wordbanks Online を用いた動詞の調査

CWO でも同様に head off/ass off/arse off/butt off の単数形と複数形について、下記の検索式で検索を行った。その結果を以下の (10)・(11) に示す⁴。

(10)	検索式 head off	該当件数 29	検索式 heads off	該当件数 22
	検索式 ass off	該当件数 2	検索式 asses off	該当件数 2
	検索式 arse off	該当件数 1	検索式 arses off	該当件数 1
	検索式 butt off	該当件数 4	検索式 butts off	該当件数 6
	検索式 buttock off	該当なし	検索式 buttocks off	該当なし

(11) 単数 head off 29 件の内訳

bawl 3, fish 1, giggle 1, grin 1, laugh 7, scream 5, shout 4, smoke 1, snore 1, squawk 1, swear 1, vomit 1, yap 1, yawn 1

複数 heads off 22 件の内訳

cheer 1, fight 1, flower 1, laugh 7, roar 1, scream 7, shriek 1, sing 1, swear 1, yell 1

単数 ass off	2 件の内訳	work 2
複数 asses off	2 件の内訳	dance 1, run 1
単数 arse off	1 件の内訳	work 1
複数 arses off	1 件の内訳	tour 1
単数 butt off	4 件の内訳	work 4
複数 butts off	6 件の内訳	work 6

こちらもBNCの結果と同様に、head off と共起する例 (51 件) のうち一番頻度の高い動詞は laugh 14 件 (27.4%) である。そして、臀部タイプで、一番頻度の高い動詞は work で16件中13件 (81.2%) であった。CWOでは、頭部と臀部の頻度を比較すると、41 対 16 (72% 対 28%) で、こちらでも圧倒的に head off の例が多いことが分かった。

そこで、以上の2つのコーパスの検索結果から考えられることは、(2a) の表現のうち、より典型的な形は ass off ではなく head off である可能性が高い、ということである⁵。

3.3. 分類

Jackendoff (1997) と Culicover and Jackendoff (2005) の用例にある動詞と、それに対するインフォーマントの容認度を以下の表 (12) にまとめる。そしてBNCの検索結果である (9) とCWOの検索結果である (11) に、それぞれの出現頻度と2名のインフォーマントの容認度を加えたものを head タイプと ass タイプに分けて表 (13) にまとめる。便宜上、それぞれの動詞を (A) laugh タイプ、(B) work タイプ、(C) その他タイプに分けた。

インフォーマントは、30代のアメリカ人男性1名 (以下 Am)、50代のイギリス人男性1名 (以下 Br) で、彼らの判断については、「容認度が高い」は○、「容認度が低い」は△、「容認できない」は×で示した⁶。

(12) Jackendoff (1997) と Culicover and Jackendoff (2005) の例にある動詞とその容認度

タイプ	動詞	head タイプ					ass タイプ				
		BNC	CWO	計	Am	Br	BNC	CWO	計	Am	Br
(A) laugh タイプ	talk	2		2	○	○				○	○
	yell	4	1	5	○	○				○	○
(B) work タイプ	dance				×	△	4	1	5	○	○
	swim				×	×				○	○
	work				△	△	8	13	21	○	○
(C) その他	program				○	○				○	○
	write				○	△				○	○
計		6	1	7			12	14	26		

(13) one's head(s) off に出現した動詞とその容認度および
one's ass(es) / arse(s) / butt(s) off に出現した動詞とその容認度

タイプ	動詞	head タイプ					ass タイプ				
		BNC	CWO	計	Am	Br	BNC	CWO	計	Am	Br
(A) laugh タイプ	bark	3		3	○	○				○	○
	bawl	3	3	6	○	○				○	○
	chat	1		1	△	△				△	△
	crow	1		1	△	△				△	△
	cry	1		1	○	△				○	△
	giggle		1	1	○	○				○	○
	grin		1	1	△	△				△	△
	laugh	27	14	41	○	○				○	○
	roar	1	1	2	○	○				○	○
	scream	11	12	23	○	○				○	○
	shout	5	4	9	○	○				○	○
	shriek	1	1	2	○	○				○	○
	sing	4	1	5	△	△				△	△
	sneeze	1		1	△	△				○	△
	snore	2	1	3	○	△				○	○
	sob	1		1	△	△				△	△
	squawk		1	1	○	○				○	○
	swear		2	2	△	×				○	×
	talk	2		2	○	○				○	○
	vomit		1	1	○	△				○	○
yap		1	1	○	△				○	○	
yawn	1	1	2	△	×				△	△	
yell	4	1	5	○	○				○	○	

(B) work タイプ	act	1		1	×	×				△	△
	dance				×	△	4	1	5	○	○
	fight		1	1	×	×				○	○
	graft				△	△	2		2	○	○
	play	2		2	×	△	1		1	○	○
	run				×	△	1	1	2	○	○
	tour				×	×		1	1	△	△
	work				△	△	8	13	21	○	○
(C) その他	bloom	1		1	△	△				△	△
	cheer	2	1	3	△	△				△	△
	fish		1	1	×	×				△	△
	flower		1	1	×	△				△	△
	gas	1		1	×	×				△	×
	pray				△	○				○	○
	smoke	1	1	2	×	×				△	△
	worry	1		1	×	×				△	×
計		78	51	129			16	16	32		

まず (A) laugh タイプに分類した動詞と (2a) や (5b) に例示されたような、臀部との組み合わせは、今回使用した2つのコーパスには存在しなかった。しかし、作例をもとにインフォーマントに確認した結果からは、(A) laugh タイプの動詞と head との組み合わせ例と、容認度に大きな差はないことが分かった。

これに対し、(B) work タイプに分類した動詞は、頭部との組み合わせ例 (4件) も、臀部との組み合わせ例 (32件) も、今回使用した2つのコーパス内に存在している。ただし二者を比較すると、work タイプ (act, fight, play) と head(s) の組み合わせは、出現頻度も低く、またインフォーマントの容認度もかなり低い表現であることが分かった。さらには、Jackendoff (1997) で例示された (3a) のような work と head が共起する例は出現せず、また (3a) に対するインフォーマントの容認度も高くなかった。

(C) その他タイプに分類した動詞は、head との組み合わせでは10件の頻度があったが、臀部との組み合わせでは出現しなかった。head の使用例はコーパス上にあったものの、インフォーマントの容認度は、用例の出なかった臀部の作例と同程度に低いものだった。ただし、Jackendoff (1997) で提示されている (5b) のうち write, program の使用に関しては、今回使用したコーパスから実例は出なかったものの、head, ass 両者それぞれとの

共起において、インフォーマントは(12)のように高い容認度を示している。

次に、表を縦軸に沿って観察する。まず *head* と共起する動詞のうち、出現頻度と容認度から見れば、中心的なメンバーは *laugh* であると判断できる。しかし、その他の動詞を周辺メンバーとすれば、それらの間には頻度にもそれほど差がなく、中心メンバーである *laugh* からの距離はここで考察することはできなかった。アメリカ人インフォーマントによれば、*head* と *work* タイプの組み合わせの容認度が低い理由は、*work* タイプの動詞で実際に使用する身体部位が *head* でないこと、または使用する身体部位と *head* との実際の距離が原因である、とのコメントがあった。

これに対し、臀部と共起する例の頻度と容認度から判断すれば、使用可能な動詞のうち、中心的なメンバーは *work* であると考えられる。ただし注目すべきは、臀部と組み合わせられる例は2つのコーパス上には少なかったものの、*laugh* タイプに分類した動詞や *work* タイプに分類した動詞と、臀部を組み合わせた作例の容認度が高い結果となっていることである。アメリカ人インフォーマントは、*head* は口や顔の部位を使用する動詞との相性が良い一方で、*ass* は頭部や顔だけに限らず体全体を使う動詞とも相性が良い、とコメントした。また腕や足を使用する動詞では体全体を使わなくとも「過度に～する」という「強意表現」として、*head* よりも多くの動詞と共起できる生産性の高い表現である、とコメントしている。

以上のバリエーションを見ても、(2a) は Jackendoff (1997) で述べられていたように、動詞の変項を認める表現であることが分かった。ただし動詞の変項は、NP が頭部か臀部かによって一定の傾向が存在するように見受けられる。

4. まとめ

Jackendoff (1997: 551) であげられた、(2a) *Fred talked his head/his ass/his butt off, but to no avail.* では、*talk* と共起する *head/ass/butt* が交替可能のように記述してある。また (3a) *Susan worked/swam/danced her head off last night.* では、*work, swim, dance* の全てが、*head off* と共起できるように記述されている。しかし今回使用したコーパスからは *talk* と *ass* の組み合わせは出現しなかった。また (3a) で使用される動詞のそれぞれが *head* と

共起する例は、BNCとCWOでは見当たらなかった。そして head とそれらの動詞の組み合わせ例は、今回のインフォーマントにとっては容認度が低いと判断された。また、インフォーマントの容認度に関して、両者の判断が一致しない場合も多かった。このことから、この表現が周辺的な表現であり、出現する場面がある程度限られ、使用する人物の性別、年齢等の要素がある程度限られる可能性があることが確認できた。

さらには、調査対象とした表現のうち、その頻度から、より典型的な表現は head を使用した表現であると考えているが、使用するコーパスによっては ass を使用した表現の方が典型的である場合がある。また Jackendoff (2007) では one's head off と one's ass off の意味は、大まかに言えば同じようなものだとしてある。しかしインフォーマントによれば head よりも butt や ass を使った例では、ただ「過度にその行為をする」意味をもつばかりではなく、work や train, exercise 等と組み合わせたり「ある程度の困難」の意味をもつ場合がある、としている。これは head の例には加わらない要素である。

上記の調査結果から、身体部位 NP によって共起しやすい動詞が異なる傾向があることが分かった。また head と ass を使った表現は、一見同じ意味を含んだ表現であるとされているが、head と ass はまったく交替可能ではないことが分かった。今後の課題として、使用できる動詞が持つ統語的要素と意味的要素に関する詳細な分類がある。それらが別の身体部位を伴う表現 (cry one's eyes out, sing one's heart out など) と類似した結果だった場合、各表現間の相関関係をみる手立てになると考える。

注

1. BNC, CWO はともに小学館コーパスネットワークのものを使用。
2. 今回の調査に協力してもらったインフォーマントは、アメリカ人30代男性とイギリス人50代男性各1名。ともに日本の大学の教員である。
3. 今回のコーパス検索では、インターネットスラングである頭字語 LMAO (laugh(ing) my ass/arse off), LMBO (laugh(ing) my butt(s) off), LMHO (laugh(ing) my head off) も対象としたが、BNC, CWO 内に該当例はなかった。ただし Google (検索オプションは英語限定) を用いてそれぞれの頭字語を検索した結果、LMAO は約 7630 万件、LMBO は約 266 万件、LMHO は約 28 万件がヒットした (2011 年 6 月 5 日現在)。また off の「除去」の意味と類似した意味をもつ out と away を派生形の可能性としてそれぞれ BNC,

CWOで検索したが、調査対象となる表現は存在しなかった。

4. 今回の調査では、上記BNC同様にLMAO, LMBO, LMHO, out, awayも検索したが、調査対象となる表現はなかった。
5. ただしWWWを使った調査では、headとassの頻度の比較は全く逆であった。Googleを利用し（検索オプションは英語限定）同様の検索式で検索を行い、対象となる表現のうち、単数形表現の検索結果を精査し計算したところ、head offを使用した例はわずか193件であった。これに対して、ass offは約5倍以上の1025件の頻度があり、arse offは約4倍の745件、butt offも約4倍の819件の頻度があった（2007年11月3日現在）。また注釈3で述べたように、インターネットスラングであるLMAO, LMBO, LMHOのWWWでの検索結果においても、臀部を使った表現がheadに比べ圧倒的に多いことから、BNC, CWOとは異なる資料（特にインターネットの掲示板やチャット、ブログの記述）では、head offの方が典型的な表現だとは言えない。WWWから得た例で使用されている動詞の内訳については、BNC, CWOの検索結果と同様に、head offの193件のうちlaughが8割を占めており、突出している。しかし、臀部を表す3種類の表現においても、laughと共起する件数が多いことは、BNC, CWOとは異なる結果であった。laughは全体の5割程度を占め、workは2割程度であった。次いで約1割をdanceが占めており、残りはgiggle, party, practice, run, sing, study, sweat, talk, walk, writeなど、多様な動詞の使用が見られた。
6. インフォーマントへの確認方法としては、コーパスから検索した例文の前後の文脈を数行含めて抜き出したものを印刷し、その表現が容認できるか否かを確認した。検索できなかった例に関しては、検索した例を利用して作例した（臀部タイプは代表してassで作例）。
7. Sawada (2000: 364-365)では、動詞と身体部位名詞が概念的な関係をもつ場合にのみ意味をなす、と述べている。また保守的なインフォーマントが容認する条件（headとtalk/laughの組み合わせのみ容認する、声や音を発生させる動詞のみ容認する、等）や容認度にゆれはあるものの、この表現がある程度生産的であることを述べている。

参考文献

- Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*. New York: Oxford University Press.
- Jackendoff, Ray (1997) "Twistin' the Night Away." *Language* 73: 534-559.
- Sawada, Shigeyasu (2000) "The Semantics of the 'Body Part Off' Construction." *English Linguistics* 17: 361-385.